

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展8 畠田和一が採集していた絶滅危惧種4」

2023 年 4 月 8 日（土）～9 月 24 日（日）

岡山県版レッドデータブック 2020 で絶滅危惧I種とされた，湾口部または外洋を主な棲息環境とする種（1）

展示する種（10 種）：アシヤガマ，ベニバイ，シマモツボ，ケシカニモリ，カタワカニモリ，ヒゼンツクシ，カタカドマンジ，ハッカクフタナシシヤジク，チョウジガイ，クリイロヒダクチキレ。

これらの種が岡山県での減少要因は，陸域からの汚水による水質悪化と考えられる。高度経済成長期に全国で問題となった公害の典型である。急激に増殖した工業地帯や都市から河川や海へ，大量の排水が規制もなく垂れ流され，富栄養化が過度に生じたのみならず，本来ならば自然界に存在しない物質も多く排出されてしまった。特に岡山・香川両県に挟まれた備讃海域は瀬戸内海の中でも東西の湾口から最も遠い奥部に位置するため，本来的に海水の交換が少なく，事実上の閉鎖水域である。そこへ汚水を急速かつ大量に流し込んだ結果，有害物質はいつまでも薄まらず濃度は高まる一方で，その場に棲む在来底生生物の大半が致命的な打撃を被ったことは想像に難くない。この結果多くの種が，1960～80 年代という比較的短期間のうちに，個体群数・個体数ともに著しく減少した。

また今回提示する種の一部は，県内で過去 50 年間生貝が見出されておらず，既に絶滅した可能性も否定できないものの，比較的新鮮な死殻が得られているか，棲息していても不思議はない環境がわずかに残されているという理由で，絶滅と断定せず，絶滅危惧 I 類としたものである。（岡山大学 福田宏）

アシヤガマ

Stomatolina rubra (Lamarck, 1822)

(腹足綱：正腹足亜綱：古腹足下綱：ニシキウズ目：ニシキウズ上科：ニシキウズ科)

展示標本： #128 [倉敷市] 下津井久須美

太平洋側は房総半島以南，日本海側は男鹿半島以南，南西諸島や伊豆・小笠原諸島を含めて暖流の影響の強い海域に広く分布し，国外は朝鮮半島，中国海南島，フィリピン，オーストラリア北部～西部など西太平洋の広い範囲から産出が知られ，同種とみられる個体はアラビア湾やアフリカ東岸のモザンビーク，南アフリカ北部から報告されている。

外洋または湾口部の潮通しのよい海岸岩礁において，潮間帯下部から潮下帯に棲息する。多様な海藻が繁茂し，特に石灰藻が豊富な場所の転石下などを好む。太平洋や日本海沿岸では決して稀少な種ではないが，高密度で産することはなく，多くの場合1～数個体が見出される程度である。内湾環境である瀬戸内海ではもともと多産せず，淡路島周辺や伊予灘など東西の湾口部に産地が偏り，より内側で継続的に産出が認められるのはせいぜい広島県の島嶼部くらいまでであるが，その海域でも1990年代後半から各地で減少傾向にある。

岡山県では文献記録はなく，畠田和一コレクションに含まれる「[倉敷市] 下津井久須美」（「藤井宏志氏採集」，1個体，#128；展示標本）からの標本が唯一の産出の証拠である。この個体は殻表の色彩が褪せ，殻口外唇も破損しているため生貝であったとは思われない。畠田が主に活躍した1950年代以前にあってもこのような死殻1個を得るのが精一杯なほどに，本県では稀産であったと考えられる。

その後も岡山県では死殻や破片を含めて一切確認されておらず，県内に今も本種が棲息している可能性は低い。ただし淡路島以東や芸南地方周辺に現在も個体群が健在であるならば，浮游幼生の伝播自体は岡山県へも継続的に生じているかもしれない。例えば備前市，瀬戸内市，笠岡市の離島に定着できても奇異ではないため，現時点では絶滅と断じるのは避ける。



ベニバイ

Hiloe variabilis (Pease, 1861)

(腹足綱:正腹足亜綱:古腹足下綱:ニシキウズ目:ニシキウズ上科:サラサバイ科)

展示標本: #2129 [瀬戸内市] 牛窓町前島

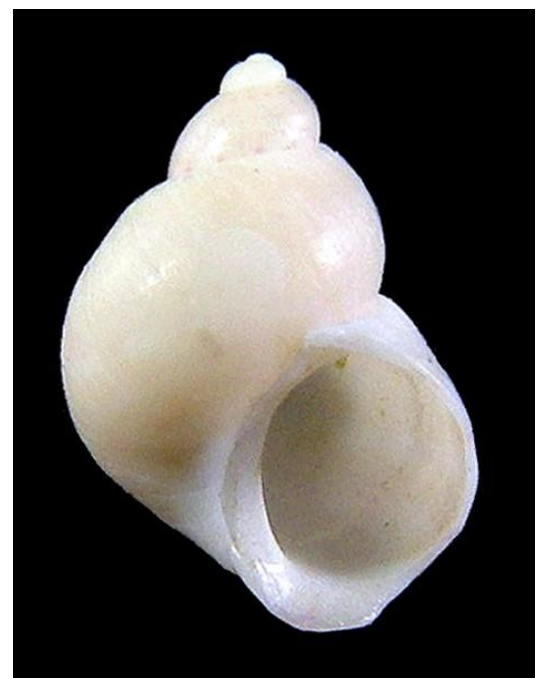
北海道南部以南、日本全国に広く見られ、東は仏領ポリネシアのツアモツ諸島、南はオーストラリア南部（東西両岸）、西は紅海～アフリカ東岸のザンジバルまで、インド-西太平洋に広く分布する。

主に外洋に面した海岸の潮間帯～潮下帯にかけて、岩礁に繁茂した海藻上に高密度で多産する。太平洋・日本海ともに広く見られ、現在でも多くの場所でごく普通に産するため、これまで保全対象とすべき稀少種という観点で言及されたことはない。ただし内湾奥には少なく、香川県では死殻だけが少数確認されている。

岡山県に至ってはそもそも文献記録が存在せず、畠田和一コレクション中の「[瀬戸内市] 牛窓町前島」(1 個体, #2129 ; 展示標本) が唯一の産出の証拠である。この個体は岩礁飛沫帯の転石下に棲息する *Angustassimineia* sp. キントンイロカワザンショウの多数個体からなる標本に混入していたもので、後種の棲息場所に打ち上げられていた死殻と推測される。この標本以外に、本種は岡山県で全く確認された例がない。

1950 年代以前の岡山県には外洋性の種も多く産出していたことが畠田コレクションから明らかであり、当時は本種も *Alcyna ocellata* A. Adams, 1860 キバベニバイや *Barleeia angustata* (Pilsbry, 1901) チャツボなどと同様、少ないながら本県沿岸に棲息していたと考えられるが、その後の甚大な環境攪乱によってそれらの種は姿を消した。仮に県外から浮游幼生が辿り着いたとしても海岸環境が劣悪なために定着できないのであろう。

本種のような種がレッドデータブックに掲載されるのは前代未聞のことで、このような種まで危機的状況を（それも絶滅危惧Ⅰ類という高ランクで）指摘せねばならないほど、戦後の岡山県沿岸でなされてきた環境破壊は常軌を逸していたと言える。



シマモツボ

Finella purpureoapicata Preston, 1905

(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：吸殻区：オニノツノガイ目：オニノツノガイ上科：スナモチツボ科)

展示標本： #2111 [倉敷市下津井] 六口島

太平洋側は東京湾，日本海側は新潟県以南に見られ，南西諸島や香港，フィリピンを経てインド-西太平洋の熱帯・温帯域に広く分布する。

潮間帯下部から潮下帯にかけて砂泥底に棲息し，本来はアマモ場の根元の礫間などに多く見られる普通種である。内湾に加えて開放的な外洋でも多少湾状に入り組んだ場所に棲息可能で，太平洋・日本海ともに多く見られ，砂浜に多数の殻が打ち上げられる場所も決して少なくないため，他県では保全対象として想定しがたい種であり，都道府県別レッドリストにおいて唯一本種を取り上げているのは東京湾を擁する千葉県だけである。同属の *Finella pupoides* A. Adams, 1860 サナギモツボは内湾奥に限定されるために埋め立てや干拓などの直撃を蒙って全国的に危機的な状況にあるのに対し，本種はそれらの開発の影響をさほど受けないので，日本全体としてはさほどの減少傾向にはない。

岡山県においてもかつては普通に産していたらしく，窪田 (1962) は「備前〔倉敷市下津井〕六口島」産の標本に言及し，また Hasegawa (1998) も国立科学博物館所蔵の櫻井欽一コレクションに含まれる「Ushimado」(瀬戸内市牛窓町) 産個体を検討している。畠田和一コレクションにも「六口島」(100 個体以上，#2111，展示標本；3 個体，#3651 (part)；1 個体，#3963 (part))，「備前朝日村切石〔現・岡山市東区正儀〕」(2 個体，「磨滅甚敷何ヤラ不明 (黒田〔徳米〕氏同定品) [昭和] 14 [= 1939].1.21.」，#2778)，「備前牛窓」(1 個体，「波部〔忠重〕氏同定 1952.2.」，1 個体，#4085)，「〔笠岡市〕白石島産」(1 個体，「1954.8.20.」，#5845) と多数の標本が含まれている。それらの一部は *Syrnola cinctella* A. Adams, 1860 ホソクチキレ，*S. serotina* A. Adams, 1863 コホソクチキレ，*Tiberia dunkeri* (Dall & Bartsch, 1906) ドウンケルクチキレなどとともに管瓶に収められており，それらの種ともども砂浜に打ち上げられていたことが窺われる。

ところがその後はほとんど確認できなくなり，今世紀に入ってから 2004 年に瀬戸内市牛窓町鹿忍で打ち上げ死殻 1 個が得られたにとどまり，その後現在までの 15 年間では全く見出されていない。1960 年代以降の水質悪化や海底攪乱が本種を追い詰め，激減させたものと考えられるが，本種のごとく他の海域で今なおごく普通に見られる種すらもこれほどの長きにわたって消息不明となり，ほぼ絶滅状態に陥ってしまうとは想像を絶する事態にほかならず，残念ながらこれが岡山県の現実である。



ケシカニモリ

Seila morishimai (Habe, 1970)

(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：吸殻区：エゾタマキビ目：ミツクチキリオレ上科：アミメケシカニモリ科)

展示標本： #4300 備中〔岡山市東区〕犬島

北海道南西部以南，太平洋側・日本海側のいずれも東北地方から九州まで広く見られ，小笠原諸島，南西諸島にも産する。国外は朝鮮半島，中国山東省，フィリピンのマクタン島・オランゴ島などから知られる。

潮間帯下部岩礁の転石間に棲息し，海綿動物を捕食する。死殻は浜辺へ頻繁に打ち上げられ，特に外洋に面した海岸に多いが瀬戸内海でも潮通しのよい場所ならば稀ではない。ただし中央部の備讃海域では多産するとは言えず，香川県で本種を記録した畠山・矢野 (1978) と瀬尾・Tanangonan (2014) はともに死殻のみ確認している。

岡山県では大垣内 (1968) が倉敷市塩生のサンドポンプ中から見出し，岡大玉野臨海 (1978) の目録にも掲載されている。畠田和一コレクションには「備中〔岡山市東区〕犬島」(「黒田〔徳米〕氏同定品」，1 個体，#4300；展示標本) 及び「備前〔倉敷市下津井〕釜島」(1 個体，#2101) からの標本が現存し，いずれも浜辺に打ち上げられていたとみられるやや摩滅した死殻である。しかしその後は県内のいずこからも全く確認されず，ドレッジや採泥器などを用いても見出されないまま今日に至る。特に畠田標本の産地である犬島や，釜島を含む水島諸島では潮間帯の岩礁が護岸などで狭められ，荒廃して貝類の多様性が低下しており，現在本種が棲息していそうな場所は見当たらない。

カタワカニモリ，ヒゼンツクシ，ハッカクフタナシシヤジク，チョウジガイなどやや外洋寄りの海岸岩礁に棲む他の種と同様，県内で激減して絶滅に近い状態にあると考えられる。笠岡諸島や日生諸島など離島ならば今も個体群が維持されている可能性は残るものの，1950 年代以前に見られた本来の棲息範囲の大半で消滅したことは確実である。



カタワカニモリ

Ataxocerithium abnormale (Sowerby III, 1903)

(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：吸殻区：エゾタマキビ目：ミツクチキリオレ上科：コンボウカニモリ科)

展示標本： #3965 [倉敷市下津井] 六口島

太平洋側は房総半島以南，日本海側は佐渡島以南，九州までと，小笠原諸島父島，韓国済州島から知られる。沖縄県には類似の別種がみられ，本種は確認されていない。

主として外洋に面した海岸の岩礁において，潮間帯下部～潮下帯の岩盤や転石の間に棲息する。Newtoniellidae Korobkov, 1955 コンボウカニモリ科の他種や，近縁な Cerithiopsidae H. & A. Adams, 1853 アミメケシカニモリ科の多くの種は海綿動物を捕食することが知られており，本種も同様である可能性が高いが，生態の詳細はいまだ不明である。

瀬戸内海ではもともと少なく，稲葉 (1982) は備後灘の愛媛県伯方島，周防灘，伊予灘のみを産地として挙げている。岡山県でも文献記録は皆無であったが，畠田和一コレクション中に「[倉敷市下津井] 六口島」産の標本 1 個体（「波部 [忠重] 氏同定 1957.6.」，#3965；展示標本）が含まれている。まだ水島灘の水質汚染が深刻化せず，海岸の埋め立てや海底の浚渫もさほどなされていなかった 1950 年代以前に，六口島を含む水島諸島の潮の流れの速い海域に本種の個体群が存在したものと考えられる。

その後は 2002 年に岡山市東区水門湾中央部の水深 1.4 m 泥底でなされたドレッジによって本種の死殻 1 個が採集されたが，これは殻長 4 mm 程度の幼貝で，しかも殻色が完全に褪せて失われた古いものであり，現在も本種が附近に棲息していることの証拠とはしがたい。人為的改変の影響を比較的受けていない笠岡諸島南端周辺などでは今も個体群が残存している可能性は否定できないものの，もしそうだとするとごく狭い範囲にのみ局限されるであろう。



ヒゼンツクシ

Vexillum inerme (Reeve, 1845)

(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：吸殻区：賊腹足上目：新腹足目：オニコブシ上科：ミノムシガイ科)

展示標本： #4399 備前〔倉敷市下津井〕六口島

最北の産地は北海道南西部で、太平洋・日本海両岸とも東北の三陸海岸・男鹿半島以南、九州までと伊豆～小笠原諸島に知られる。沖縄でも記録はあるが、本当に産するか否かは不明である。国外は朝鮮半島に産する。

主に太平洋や日本海の外洋に面した海岸の潮間帯下部～潮下帯に普通に見られる種で、石灰藻が覆う岩礁の隙間や表層を匍う。瀬戸内海でも湾口部の紀伊・豊後両水道北端では決して稀な種ではないが、湾奥に相当する中央部では少なく、山口県でもより内湾的性格の強い周防灘には見られず伊予灘に限定される。

岡山県での文献記録は存在しないものの、畠田和一コレクション中に「備前〔倉敷市下津井〕六口島」(1 個体, #4399 ; 展示標本) 及び「備中〔笠岡市〕白石島」(「アハヂツクシ (?) 黒田〔徳米〕氏同定品」, 1 個体, #6994) 産の標本が現存する。両個体とも殻表がやや摩滅し、白石島産は外唇の一部が破損しており、ともに浜辺へ打ち上げられた死殻とみられる。畠田和一が活躍した1950年代以前にあっても、岡山県では生貝や新鮮な死殻を得るのが容易でない程度に寡産であったと考えられる。

その後は一切見出されたことがなく、もともと個体数の多くなかった本種は高度経済成長期以降の水質汚濁や海岸環境の破壊によって本県から消え去った可能性がある。岡山県ではベニバイ, *Plesiotrochus acutangulus* (Yokoyama, 1924) チグサカニモリ, チャツボ, *Aesopus japonicus* Gould, 1860 コハナマツムシ, *Polia subrubiginosa* (E.A. Smith, 1879) コホラダマシ, ハッカクフタナシシャジクなど、外洋的環境の岩礁域潮間帯～潮下帯に棲息する種がことごとく確認できなくなっており、本種もその例の一つに数え上げうる。ただし笠岡諸島など離島にはまだ生き残っているかもしれないため、改めて精査が必要である。



タカカドマンジ

Guraleus semicarinatus (Pilsbry, 1904)

(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：吸殻区：賊腹足上目：新腹足目：イモガイ上科：マンジガイ科)

展示標本： #4151 [倉敷市] 下津井

房総半島・佐渡島以南，九州までに分布するとされる。朝鮮半島にも分布するかどうかは検討の余地がある。

潮下帯の砂礫底に棲息するらしく，時に死殻が浜辺に打ち上げられるが，棲息の実態に関する情報はいまだ乏しい。瀬戸内海では備讃瀬戸及び水島灘・備後灘及び燧灘・安芸灘・伊予灘に「普通」に産するとされている（稲葉, 1982）。岡山県でも文献記録はなく，畠田和一コレクションに含まれる「[倉敷市] 下津井」産の状態の良い（採集時は生貝であったかもしれない）1 個体（#4151 (part), *Etremopa gainesii* (Pilsbry, 1904) チャイロフタナシシヤジク 1 個体とともに；展示標本）が唯一の産出の証拠で，その後は死殻も一切確認されていない。高度経済成長期の海岸の埋め立てや水質汚濁，海底の砂の浚渫などによって棲息環境が奪われ，絶滅またはそれに近い状況に追い詰められた可能性が高い。



ハッカクフタナシシヤジク

Hemicythara octangulata (Dunker, 1860)

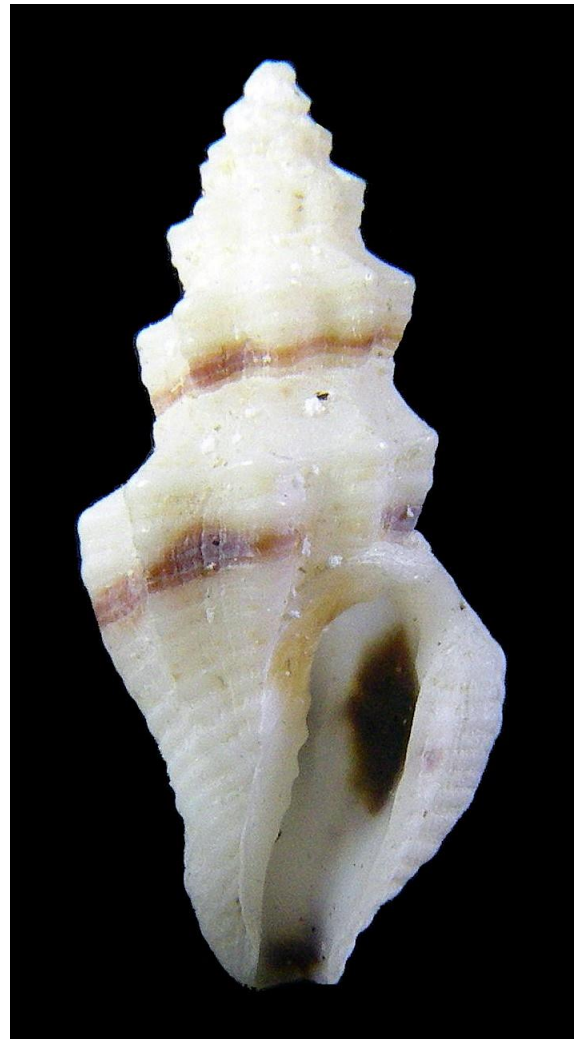
(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：吸殻区：賊腹足上目：新腹足目：イモガイ上科：マンジガイ科)

展示標本： #2217 [倉敷市下津井] 六口島

太平洋側は房総半島，日本海側は男鹿半島以南，南西諸島までと朝鮮半島に分布する。

主として太平洋や日本海の外洋に面した海岸の潮間帯下部～潮下帯に多く見られる種で，多くの場合石灰藻が覆う岩礁の隙間や表層を匍匐する。瀬戸内海でも全域に普通に産するとされ，広島県や香川県では近年も採集例がある。しかし岡山県では文献記録は存在せず，畠田和一コレクション中の「[倉敷市下津井] 六口島」産標本（1 個体，#2217；展示標本）が現在に至るまで唯一の産出の証拠である。

ベニバイやヒゼンツクシなどと同様，どちらかといえば外洋水の影響を受ける潮通しの良い場所を好む種であるため，岡山県では同様の環境が護岸や水質汚濁などによってことごとく損なわれた今日，特に県内本土沿岸で生貝が再発見される可能性はほぼ絶望的である。ただし笠岡諸島の南部など島嶼部にはまだ個体群が存続している可能性も否定できず，今後の精査が必要である。



チョウジガイ

Mormula philippiana (Dunker, 1860)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：直神経区：被側亜区：汎有肺下垂区：発端有肺上目：トウガタガイ目：トウガタガイ上科：トウガタガイ科)

展示標本： #4535 備前〔倉敷市〕下津井

近年の文献の大半が太平洋側の北限を房総半島としているが、Nomura (1938) は青森県下北郡大間町での産出に言及している。日本海側は男鹿半島以南に知られる。太平洋・日本海両岸とも九州まで分布し、南西諸島にも産する。国外は朝鮮半島、フィリピンから記録されている。

外洋ながら比較的波穏やかな海岸、または潮通しのよい内湾湾口部において、岩礁の潮間帯下部～潮下帯に棲息し、特に岩盤の隙間に溜まった砂中や転石下の間隙を好むが、死殻が頻繁に浜辺に打ち上げられる割に生貝を目にする機会が多くない印象がある。瀬戸内海では稲葉 (1982) は全域に「普通」としたが、実際には中央部や周防灘など内湾的性格の強い海域では稀産または全く産出せず、山口県では伊予灘に限定され、個体数も少ない。広島県芸南地方でも仁方町で生貝が確認されているものの、倉橋・大柿両町では死殻のみ記録されている。

岡山県では岡大玉野臨海 (1978) の目録に登載されているのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクション中に「備前〔倉敷市〕下津井」(「藤井氏採集」，1 個体，#4535；展示標本) が現存する。この個体は殻表に摩滅が見られず、殻口内の光沢も強いいため採集時は生貝であった可能性が高い。その後は長く県内から見出されないままであったが、2011 年に笠岡諸島真鍋島南東岸の潮間帯転石地で死殻 1 個が採集された。このため笠岡諸島には現在も個体群が存在するとみられるが、畠田標本の産地である下津井周辺では棲息環境自体が著しく攪乱されており、少なくとも本土沿岸での確認は絶望的である。現在は島嶼部にわずかに産出するのみと考えられ、今後の個体群存続が危ぶまれる。



クリイロヒダクチキレ

Tropaeas castanea (A. Adams, 1863)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：直神経区：被側亜区：汎有肺下亜区：発端有肺上目：トウガタガイ目：トウガタガイ上科：トウガタガイ科)

展示標本： #4337 備前朝日村片岡別荘〔現・岡山市東区正儀〕

太平洋側は房総半島以南，日本海側以南，九州まで記録がある。国外からは知られていない。

全国的にも産出記録の少ない種で，堀 (1996) は「太平洋岸では砂泥底からドレッジで得られることから，沖合の砂泥底に棲むものと思われる」と推測している。

瀬戸内海での文献記録も従来は皆無であったが，畠田和一コレクションには「備前朝日村片岡別荘〔現・岡山市東区正儀〕」産の「チャイロクチキレ (黒田〔徳米〕氏同定 1952.11.)」(#4337；展示標本) は *Syrnola tenuisculpta* (Lischke, 1872) ヌノメホソクチキレ 59 個体・*Syrnola crocata* (A. Adams in Sowerby II, 1865) チャイロクチキレ 4 個体と本種 1 個体からなり，この 3 種が同時に砂浜に打ち上げられていたと考えられる。それらのうちヌノメホソクチキレとチャイロクチキレは近年も高梁川河口や倉敷市高洲で生貝が確認されている一方で，本種は死殻すら見出されておらず上記畠田標本が唯一の産出の証拠である。また他の 2 種も畠田標本の産地である岡山市東区正儀周辺（児島湾湾口部）ではその後全く採集されておらず，現在当地には棲息していないと考えられる。ある場所の環境条件が悪化すると多くの場合稀少な種から順に減少・消滅してゆくが，本種も他の 2 種に先駆けて岡山県から姿を消そうとしている。

